

で進行が速く、白質病変が主体である点が特徴的であり報告した。

7. オリブ橋小脳萎縮症 (OPCA) の胃運動機能低下に対するクエン酸モサプリドの試み：胃電図による検討

石川千恵子, 吉川由利子, 米津彰一
朝比奈正人 (千大)
鈴木淳也 (千葉県循環器病)

症例は経過5年のOPCA53歳女性。2年前より出現した胸のつかえおよび食欲低下に対し、クエン酸モサプリド(選択的セロトニン5-HT₄受容体作動薬)を投与し、効果を胃電図にて評価した。治療により消化器症状は消失し、胃電図上も胃運動機能の改善を認めた。モサプリドはドパミン遮断作用を持たないため、OPCAなどの錐体外路症状を伴う疾患の胃運動機能障害の改善に有用である可能性がある。

8. 糖尿病および臭化ジスチグミンの副作用により顔面に著明な食事性発汗過多を生じた1例

平賀陽之, 大木 剛, 朝比奈正人
新井公人 (千大)

症例は顔面に著明な食事性発汗を認めた糖尿病性ニューロパチーの56歳男性。服用中の臭化ジスチグミンの中止で症状は改善した。本症例の著明な顔面発汗過多は糖尿病による四肢発汗低下による代償性発汗過多、糖尿病性発汗過多に抗コリンエステラーゼ剤による薬剤性発汗過多が重なって起こったと考えられた。糖尿病患者は抗コリンエステラーゼ剤によって発汗過多を起こす可能性があると考えられた。

9. 筋萎縮性側索硬化症 (ALS) における口腔内圧測定の有用性

三澤園子, 朝比奈正人, 内山智之
服部孝道 (千大)

ALSにおける口腔内圧測定の有用性、及び臨床症状との関連性について検討した。

ALS患者6例を対象に、通常の呼吸機能検査と口腔内圧測定を行った。通常の呼吸機能検査では1例が%肺活量(%VC)の低下を示したのみであったが、最大呼気時口腔内圧(MEP)では4例が低下を示した。しかし臨床症状とは有意な関連は得られなかった。

口腔内圧測定は、呼吸筋麻痺を鋭敏に検出できる簡便かつ有用な方法である。また、ALSでは吸気筋に比し呼気筋が早期に障害される可能性がある。

10. MRIで広範な白質病変がみられた間歇型一酸化炭素中毒

根本有子, 古口徳雄, 八木下敏志行
伊藤誠朗, 山内利宏, 大石博通
小林繁雄, 中村 弘, 佐藤 章
渡辺義郎, 中村達夫, 伊東範行
(千葉県救急医療)

48歳男性。排ガス自殺企図後、急性一酸化炭素中毒の診断でOHPを施行し、昏睡状態から回復した。約3週間後から、痴呆と軽微な錐体外路症状が進行し、間歇型と診断し、OHPを再開した。7週間後のMRIでは、淡蒼球病変を伴わない両側の広範な白質病変が出現した。本症のMRI所見では、白質病変が必須であり、淡蒼球病変の有無は予後に関与しない傾向であった。

11. 脳血管造影検査の新たな手技

—経橈骨動脈アプローチについて—

鈴木淳也, 松田信二, 朝比奈真由美
本間甲一 (千葉県循環器病)

脳血管造影検査に際しては大腿動脈からアプローチする方法が一般的だが、検査終了後長時間の安静を強いられ患者は苦痛を訴えることが多い。経橈骨動脈アプローチは手技に慣れる必要があり、穿刺部対側の椎骨動脈へのカテーテル挿入が困難であることなどの欠点があげられるが、検査終了後の身体的負担が極めて少なく、高い検査成功率、重篤な合併症も起こりにくく今後広く行われる手技になるものと考えられた。

12. 眼神経帯状疱疹後に対側の小脳性運動失調症をきたした1例

荒木則幸, 高谷美成, 丹羽直樹
(下都賀総合)

眼神経帯状疱疹後(HZO)感染後4週間で、対側の運動失調をきたした1例を経験したので報告した。症例は82歳男性、左眼痛、左前頭部の皮疹出現後4週間で、構音障害、右上下肢運動失調を呈し、MRIにて右上小脳動脈領域の脳梗塞が認められた。HZO後に、遅発性の肉芽腫性血管炎を起こした症例の報告の多くは、同側テント上血管病変であるが、本症例のように、対側テント下血管まで及ぶ可能性がある。

13. 橋出血に見られたocular tremorの経時的変化

小松幹一郎, 高木健治, 下江 豊
(鹿島労災病)

橋出血2例でocular tremor(OT)を約3年間追